①本時を構想する上でポイントとなる素地

○問題解決のための知識・技能

・１０までの数の合成・分解や数図ブロックの操作ができる。

○既習とつなぐ見方・考え方

・数量の増減を，数図ブロックを操作して考える学習をしている。

教材研究ノート№1-A-3

≪学習問題≫

≪学習問題≫

５ひきのカエルが　はすのはに　のっています。

そのうち　２ひきのカエルが　いけにとびこみました。

はすのはの上には　なんひきのカエルがのこったでしょう。

≪定着・活用問題≫

主眼

授業計画･実施記録

②見通し：減っちゃうから，ひき算じゃないの？

→　ひき算のときみたいに，数図ブロックを使えばできそうだ。

②学習課題：カエルをすうずブロックにへんしんさせて，うごかして，のこりのカエルのかずをもとめよう。

③個人追究: ブロックを操作して，残りのカエルの数を求める。

１　課題とまとめを一体のものとしてとらえるには

④共同追究前半（解法の比較検討）

「どの求め方にも共通していることはなんだろう？」

→「５個から２個を取って，減っている。」

④共同追究後半（思考を深める）

「たし算のときのブロックの動かし方とどこが違うのかな？」

→「たし算の時はくっついたけど，今日のは離れていく」

「ブロックが増えるのと減るのが違う」

「ブロックを動かす向きが違う。反対に動かした」

⑤まとめ（児童生徒の言葉で）

・今日はブロックを取って，減っていくお話だった。

・たし算と反対の向きにブロックを動かした。

⑥定着･活用問題

（１）７にんの　こどもが　あそんでいます。

４にん　かえると なんにんに　なるでしょう。

（２）すいそうに きんぎょが ８ひきいます。

おとこのこが　あみで３ひき　すくいました。

　　　　すいそうに　なんひきのこったか

ブロックをつかって　せつめいしてみよう。

＜本時の展開に当たっての留意点＞

・単にキーワードだけに頼るのではなく，問題文全体から，ブロックなどの半具体物を用いて，どのような操作をするときにひき算を用いるのかを判断できるようにしたい。

・単元全体を通して，単に計算の答えを出すことができればよいのではなく，言葉や絵，図を用いて場面を表したり，式に表したり，問題づくりをしたりする活動を大切にしたい。

【板書計画】